

五代十国時代の通貨状況

宮 澤 知 之

緒 言

唐宋の統一帝国に挟まれ、多くの王朝が分立した五代十国時代は、貨幣史上どのような位置にあるのか。唐宋変革期の重要な時期にあたるにもかかわらず、文献資料の少なさという壁を乗り越えて研究を進めることはなかなか困難である。しかし近年出土資料が増加し、研究条件が変わってきた。本稿は従来から知られる文献資料に出土資料を加えて、五代十国時代の通貨状況を考察するものである。^① 本稿で用いる出土品のデータは、ほぼ『中国錢幣大辞典 魏晉南北朝隋編・唐五代十国編』（中華書局、二〇〇三年）によっている。

一 研究概況と本稿の視点

五代十国時代の幣制の特徴について、これまでどのように認められてきたか確認しておこう。まず多くの研究者で見方が一致するところは以下の三点である。

- (1) 額面の大きい銭が発行されたこと。
- (2) 銅銭のほか低品位の鉄銭・鉛銭が発行されたこと。

(3) 政治的割拠のため、経済は王朝ごとに封鎖的であり、錢法も異なつて、鉄錢・鉛錢の流通範囲は狭いこと。

華北の五代王朝が銅錢体制を維持したのに対し、十国の通貨は多様である。それゆえ五代十国時代における中国全域の通貨状況を論じる場合、十国通貨の多様性がこの時代を特色づけると捉えられている。

このような五代十国時代の通貨に関する三点の概括は、日本や中国における貨幣史研究の初期である一九二〇年代から現在にいたるまでほとんど変わりが無い^②。ただし事実認識は概ね一致する反面、評価に関しては意見が分かれる。

第二点に関して、銅錢の不足を補うためとする見方が多いが、戴振輝は逆に鉄錢・鉛錢が銅錢を駆逐した、つまり低品位貨幣の発行が銅錢不足を招いたとし、宮崎市定は、王朝が銅錢を蓄藏する一方、対外通商を有利にするため一種の平価切下げ政策として、低品位の鉛錢を発行し、さらに品位を落して鉄錢を発行したとする^③。銅錢のほか鉛錢や鉄錢を加えた貨幣流通量に関する意見が分かれ、彭信威は、貨幣供給は緊縮状態であるとし、最近、全体的には貨幣は順調に流通したとする説も現れた^⑦。これは近年出土資料が格段に増加した状況を反映すると思われる。第三点に関して、十国の経済は華北と比べて富裕であるけれども、中国全域では政治的分裂に対応して経済状況はよくなく、幣制はそれを反映して乱れているとする見方が比較的多いのに対して、宮崎は、十国の各国において対外流出しない低品位貨幣が自国の産業保護のために機能したと積極的な評価を与える^⑧。

以上のように評価の分かれる部分はあるものの、基本的な事実認識の点では上述の三点は認められていると言える。しかしながら私は第三点についていずれの学説についても疑問を感じる。なぜなら、中国前近代の円形方孔の錢貨、とくに明代初期までの錢貨の特徴の一つは、貨幣素材・大きさが大体同じであれば、錢文の相違に関わりなく、前の王朝の錢貨であっても同じ価値で受容し通用することにあつたからである。ただし、時代によって等価と認められる大ききの偏差の許容範囲は、たとえば六朝時代における偏差は大きく、唐宋時代では比較的小さいとい

うように異なる。唐宋に挟まれた五代十国時代の一文の錢貨は、極端な大小の差がない。極端な差がなければ、他国から入ってきてても自国の錢貨と同じ価値となる。五代十国錢だけが厳密に大きさに規定されるはずはない。

また金属組成（錢料例）についても少々の差があっても等価である。北宋錢の錢料例は何度か変更されたが幣値に影響しない^⑨。もちろん銅錢（厳密には青銅錢）と鉄錢のように素材の金属が異なる場合は、国家の規制力によって比価の決まり方が異なる。宋朝財政では銅鉄錢の等価が原則で、宋朝の通貨政策が適正なとき民間市場でも等価であり、等価から乖離する場合でも等価に近い比価で推移する。北宋末のように、通貨政策が乱れると等価からの乖離は大きくなる。異なる金属の貨幣が等価かどうかは国家財政による規制力の問題である^⑩。いま等価の場合を例にしたが、国家財政がたとえば銅錢と鉄錢の比価を一對二と定めれば民間市場でも一對二を大きく乖離しない範囲で推移するのである（異種貨幣間の比価は等価となる貨幣個数で表示する）。

さらにこのような錢貨の性格は王朝に関係なく貫徹する。宋代に唐代の開元通宝（図1）が混用されたことはよく知られた事実である。前代の錢貨が混用されるということは、錢文の違いも問題にならないということである。すなわち中国社会は歴代の錢貨に次の時代にも通用するという無制約性を与えているのである。錢貨の材質や錢文の違いが意識され等価でなくなるのは明代からである^⑪。同様に五代十国時代は、唐の錢貨がそのまま通用した。このような状況下で、各国が唐代とほぼ同じ素材・大きさの開元通宝・乾元重宝を鑄造発行しても、あるいは独自の錢名の錢貨を発行しても、社会は同じように受け入れる。開元通宝を鑄造発行するのは、普遍的な通用力のある錢貨を匿名で作り出すことでもある。これに対し、年号錢や国号錢は、やはり素材や大きさが大体同じであれば開元通宝と等価で通用するが、その発行の主体である皇帝・王朝を意識させることになる。

以上のような錢貨の性格から判断すると、十国の鉄錢や鉛錢は、ほぼ同じ大きさでありさえすれば、換言すると小平錢と見誤らない範囲であれば、それらが通用する王朝ではどこでも通用することを意味する。ただし注意すべ

きは異種金属の錢貨の比価はそれぞれの王朝が決めることであり、自国内で決められた比価が他国で通用するとは限らないことである。

二 五代十国の錢貨の特徴

五代十国の諸政権が発行した錢貨はじつに多様である。いくつかのグループに分け各国の通貨事情をまとめてみよう（表「五代十国時代の錢貨」を参照）。

(1) 華北の五代王朝は後梁を除いて王朝独自の錢貨を鑄造した。後梁（九〇七—九二三）については、開平元宝・開平通宝という大錢が各一枚出土している。これらは疑問のあるものとされるが、たとい真正のものとしても現存量が少ないから、おそらく王朝を開いた記念貨幣であり、通用錢ではない⁽¹²⁾。従つて通用錢は唐代までのものを継承しただけで、新しい錢貨の発行はなかったと考えられる。

後唐（九二三—九三六）・後晋（九三六—九四六）はそれぞれ年号錢一種だけである。両国とも改元に際して新錢を鑄造しなかったため、後唐の天成元宝・後晋の天福元宝は年号錢であつても、それぞれ王朝を象徴する錢貨となつてゐる。後漢（九四七—九五〇）の漢元通宝（図3）、後周（九五—九六〇）の周元通宝は国号錢である。

年号錢や国号錢は他国に対して政権の独立性を、自国の民に対して支配の正当性を示すものである。そして年号錢はより強く皇帝が意識され、国号錢はより強く王朝が意識された錢貨である。五代王朝は同時代の他の王朝から唐の正統な後継者と見なされることもあつたが、王朝が乱立する時代にあつて他国と区別する必要がある、国号を錢貨に記したのである。

五代王朝の錢貨の特徴は、鑄造した各国でともに一種類の錢貨だけであつたこと、小平錢だけであること、すべ

て銅銭であったことである。銭名は異なるが唐代の開元通宝の体制が維持されていることが分かる。なお五代王朝は独自の銭貨を発行したとはいえ、開元通宝を無効にしたことはない。むしろ流通量は圧倒的に開元通宝が多く、窖藏銭から見ると九五%以上に及ぶ¹³。五代王朝の銭貨と唐銭が等価であったことは、五代銭と唐銭が混ざって出土することから判断できる。

ところで文献で五代王朝の通貨状況を調べると、唐代後半と変わらない事態が見られる。後唐の同光二年（九二四）の記事に、江南から鉛錫銭が船で運び込まれ、市肆の間、堂々と使われていたとあり、天成四年（九二九）の記事に次のようにある。

勅す。先の条流に、三京諸道州府、市使の銭内に於いて、鉛鉄銭を夾帶するを得ずとあり。已に約束すると雖も、仍お公然と行使するを聞く。今後人、銭陌内に於いて、一文より兩文に至るを捉到すること有らば、使う所の銭は多少を計らず、並びに官に納入し、犯す所の人は条流に准じて科罪せよ。『五代会要』卷二七、泉貨、天成四年九月

三京諸道州府とあるから、華北の広い範囲にわたって江南鑄造の鉛銭・鉄銭が流入し、銅銭の銭陌内に紛れ込んでいたと言う。

後唐と後晋が鉛錫銭・鉄鑞銭・鉛銭を繰返し禁止しているのを見ると、五代初めはそれらがかなり流通していたようである。それには後唐と後晋の銭貨鑄造額が少ないという事情も関係している。ことに後唐の天成元宝は少なく、後漢の天福元宝も官鑄銭は少ない。後晋以後この種の禁令が伝えられていないのは、鉛錫銭等の流通が終息にむかったことを意味しない。次の宋朝の初期においても華北では鉛銭の流通が依然つづいているからである。

銅銭に鉛銭・鉄銭を混ぜる行為は、禁令の網の目をすり抜けるためである。本来、五代王朝は銅銭専一制度であるから、銅銭と鉛銭・鉄銭の比価を公定することはありえない。しかし禁令があつて混ぜてしまうから、鉛銭・鉄

	開元通宝 開元通宝 大唐通宝 大唐通宝 永通泉貨(隸書) 永通泉貨(篆書) 永通泉貨	唐錢 唐錢 国号 国号 吉語 吉語 吉語		銅 銅 銅 鉄 銅 銅 鉄	二当一 当十 小平 小平 当十 当五 大錢 当銅錢十	極罕見 少見 罕見 極罕見 罕見 罕見
燕	永安一十 永安一百 永安五百 永安一千 永安一十 永安一百 永安五百 永安一千 順天元宝 順天元宝 順天元宝 貨布三百 貨布三百 応聖元宝 乾聖元宝 応天元宝 五銖	吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 吉語 王莽錢 王莽錢 吉語 吉語 年号 漢錢	十 百 千 三百 三百 拾 百 万	銅 銅 銅 銅 鉄 鉄 鉄 鉄 鉄 鉄 鉄 銅 鉄 銅 銅 銅 鉄	当十 当百 当五百 当千 当十 当百 当五百 当千 当十 当百 当千 当三百 当三百 当十 当百 当万 小平	少見 少見 罕見 較罕見 少見 少見 罕見 少見 罕見 罕見 少見 罕見 罕見 極罕見 極罕見 極罕見 少見
北漢	漢元通宝	後漢錢		銅	小平	

- ・ 錢種については各種図録で出入りがあり、どの王朝のものと認定するか、通用錢か記念錢か、幣値はいくらか等の点で必ずしも一致しない。また元宝か通宝か判明しないものがある。ここでは概ね『中国錢幣大辞典 魏晉南北朝隋編・唐五代十国編』の呼称に従うことにする。ただし鎮庫錢(財庫のお守り用の錢貨)は除いた。
- ・ 出土錢では、呉・荆南・北漢・岐の錢貨は知られていない。
- ・ 『中国錢幣大辞典』は錢貨ごとに残存量の目安を示す。較少見・少見・較罕見・罕見・極罕見であるが、これらの区別はあまり厳密ではないようである。
- ・ 残存量について、本稿では『中国錢幣大辞典』が示す同一錢種の書体の違いによる残存量の違いは必要ないので、同一錢文の錢貨の中から多いものを採用した。また一般によく残っているものは残存量の目安を記載しないが、なかには出土例が極端に少ないにもかかわらず、記載のないものがある。それについては記載もれと判断し極罕見とした。また従来一個しか発見されていないものは除外した。
- ・ 空欄は大量にあるもの。
- ・ 呉越と北漢の銅錢は文献の記録(註23『文献通考』の記事)だけで実物が確認されていない。北漢の銅錢を漢元通宝とするのは本稿の推定である。
- ・ 南漢の鉛銭は近年様々な背文のある開元通宝や五五(例えば桂・昌など)や面文の異なるものも発見されたが、正式の報告が出ていないようなので記していない。
- ・ 幣値は概ね『中国錢幣大辞典』に従う。該書の幣値推定は錢体の大きさにもとづく。閩・楚の幣値は本稿の考証による。

五代十国時代の銭貨

国名	銭 名	年号ほか	背 文	金属	幣 値	残存量		
後唐	天成元宝	年号		銅	小平	罕見		
後晋	天福元宝	年号		銅	小平	較少見		
後漢	漢元通宝	国号		銅	小平			
後周	周元通宝	国号		銅	小平			
前蜀	永平元宝	年号		銅	小平	較少見		
	通正元宝	年号		銅	小平	較少見		
	天漢元宝	年号		銅	小平	較少見		
	光天元宝	年号		銅	小平			
	乾德元宝	年号		銅	小平			
	咸康元宝	年号		銅	小平			
後蜀	大蜀通宝	国号		銅	小平	罕見		
	広政通宝	年号		銅	小平	罕見		
	広政通宝	年号		鉄	小平	罕見		
	広政通宝	年号		鉛	小平	罕見		
呉越	開元通宝	唐銭		銅	小平	銅鉛比価不明 銅鉛比価不明	不明	
	開元通宝	唐銭		鉛	小平			
閩	開元通宝	唐銭	閩(国号)	鉄	大銭	当鉛銭十	当銅銭二	較少見
	開元通宝	唐銭	閩(国号)	鉛	大銭	当鉛銭十	当銅銭二	較少見
	開元通宝	唐銭	殷(国号)	鉄	大銭	当鉛銭十	当銅銭二	罕見
	開元通宝	唐銭	閩(国号)・福	鉛	大銭			
	永隆通宝	年号	閩(国号)	鉄	大銭	当鉛銭十→当百		較罕見
	天德通宝	年号		銅	大銭	当鉛銭百		罕見
	天德重宝	年号	殷(国号)	銅	大銭	当鉛銭百		罕見
	天德重宝	年号	殷(国号)	鉄	大銭	当鉛銭百		罕見
	乾封泉宝	唐銭	天策・天府・天・策	銅	大銭	当鉛銭百		少見
楚	乾封泉宝	唐銭	天策・天府・天・策	鉄	大銭	当鉛銭百		少見
	天策府宝	封号		銅	大銭	当鉛銭百		罕見
	天策府宝	封号		鉄	大銭	当鉛銭百		罕見
	乾元重宝	唐銭		銅	大銭	当鉛銭百		罕見
	乾元重宝	唐銭		鉄	大銭	当鉛銭百		罕見
	開元通宝	唐銭	月・星・潭	鉛	小平	当鉛銭十		罕見
南漢	乾亨通宝	年号		銅	小平	当鉛銭十		罕見
	乾亨重宝	年号		銅	小平	当鉛銭十		少見
	乾亨重宝	年号	無背・邕	鉛	小平			
(桂州)	開元通宝	唐銭	金・南・宝・興・数字	鉛	小平			
(桂州)	五五	六朝銭	金・南・宝・興・数字	鉛	小平			較少見
(桂州)	乾元重宝	唐銭		鉛	小平			較少見
南唐	保大元宝	年号	天	銅	当五			極罕見
	保大元宝	年号	天	鉄	当五			極罕見
	唐国通宝	国号		銅	当五			極罕見
	唐国通宝	国号		銅	当二			罕見
	唐国通宝	国号		銅	小平			
	唐国通宝	国号		銅	二当一			
	唐国通宝	国号		鉄	小平			較罕見
	唐国通宝	国号		鉛	二当一			極罕見
	開元通宝	唐銭		銅	小平			
	開元通宝	唐銭		銅	当二			極罕見

銭は銅銭と等価になっている。後漢以後、鉛銭・鉄銭の禁止が弛むと、むしろ鉛銭・鉄銭は銅銭と混在させる必要性が低くなり、銅銭とは異なる独自の流通の場をもつこととなった。それは国庫に通用せず民間市場でのみ通用する貨幣であり、銅銭との間に相場の立ったことが推定できる。前述同光二年の記事には、江南から舟運された鉛錫銭は「好銭と換易し、富室に蔵貯す」と記される。同光二年は鉛銭・鉄銭等の禁令が初めて出た年であり、これ以前、好銭つまり銅銭との間に相場の立っていたことが分かる。このことから逆に禁令が再び弛んだ後漢以後にも、銅銭と鉛銭・鉄銭の間に相場があったと認めるのが自然である。銅銭と鉛鉄銭の比価がどのくらいか史料を欠くが、唐の開元二十六年（七三八）長安で、銅銭一に対し、鉄錫を混入した江南の私鑄銭七く八が相場であったことが参考になるかも知れない。¹⁵

鉛銭・鉄銭が銅銭とは異なる独自の流通の場をもったのは、銅銭のみでは社会が必要とする錢貨の流通量をまかなえないからである。後周の周元通宝を除くと華北の王朝の鑄造額は多くなく、市場に見られる普通の銅銭は唐の開元通宝である。後晋は八か月間ほど、銅を所有するものなら「公私を問う無く」自由な鑄銭を認めた。はじめは錢文（天福元宝）と重量を遵守することになっていたが、¹⁶まもなく任意の重さによる鑄造、すなわち輕小の天福元宝（図2）の鑄造を認めたのも、¹⁷官鑄銅銭の不足を補う苦肉の策であった。後漢以後、鉛鉄銭禁止の令が見られなくなるのは、鑄造額が増大するとともに、民間における通貨の需要について、これらの銭が一定の役割を果たすことを、王朝が認めた結果ではないだろうか。

一方、銅銭の私鑄と銅器への改鑄の禁令は、五代を通して発布されている。これは銅銭の減少を防止するための措置である。ところが後周の顯徳二年（九五五）世宗による廢仏が始まると、大量の銅が世に出ることとなった。そこで後周は朝廷の法物以外の銅器の使用を一切禁止して、民間より銅を買い上げた。政府による銅材の独占の方針が打ち出されたのであり、この銅を使って後周は大量の周元通宝（図4）を鑄造した。¹⁸周元通宝は後漢までの錢

貨と比べると製作が格段に精巧なものとなり、北宋銭と変わらない出来ばえとなった。北宋のとき粗悪な私鑄銭の排除にかなり成功するが、官鑄銭の品質の向上はその前提となる。

(2) 十国では、王建が帝を称して建国した前蜀（九〇七—九二五）が、永平元宝・通正元宝・天漢元宝・光天元宝（図5）・乾德元宝・咸康元宝という六種類の銅銭を発行した。永平（九一一—九一五）は帝国となって三番目の年号で、以後滅亡まで改元のたびに新銭を発行した。これら六種の、銅銭・小平銭・年号銭という特徴は五代王朝と同じであり、改元のたびの年号銭という特徴は、宋朝の通貨制度の先駆けとなるものである。しかも現存量を見ると、永平元宝が非常に少ないほかは、比較的多くの量が残っている。一つの年号の期間は乾德（九一九—九二四）が六年ある以外はすべて一年間にすぎないことを考慮すると、前蜀は鑄銭事業に力を注いだことが分かる。

前蜀滅亡後、後唐から西川節度使に任じられた孟知祥が自立し帝を称して建国した後蜀（九三四—九六五）には、大蜀通宝（国号銭）と広政通宝（年号銭）がある。大蜀通宝は史書に記載がないようだが、広政通宝は広政年間（九三八—九六五）の鑄造であるから、大蜀通宝は広政通宝の前、明德年間（九三四—九三七）の鑄造であると思われる。広政通宝は銅・鉄・鉛の三種がある（図6）。銅銭の開鑄は広政の初期と思われ、鉄銭は広政十八年（九五五）、後周に攻めたてられ軍費調達のために鑄造したものである¹⁹。鉛銭の開鑄時期は不明。いずれも小平銭であること、非常時に鉄銭を導入したが基本通貨は銅銭であること、国号または年号銭であることなどの点は、後蜀もまた特に前半は五代王朝と近い通貨体系をもつことを示す。

鉄銭は「外郡の辺界」すなわち国境地域で行使した。華北の後周・東隣の楚と接するが、楚は九五一年に滅んで群雄勢力が割拠したので統一的な通貨政策は不可能となっていた。後蜀の銅銭が流出し楚の鉛銭が流入する事態を防いだり緩和したりするのが、国境地域で鉄銭を導入した目的であったと思われる。この時、銅銭四〇〇文と鉄銭

六〇〇文の割合で混用し一貫とした。⁽²⁰⁾すなわち銅銭と鉄銭は等価である。しかし滅亡前には鉄銭の幣値は、一貫が銅銭四〇〇文にまで下がったという。⁽²¹⁾また首都成都に流入したが、その割合は銅銭のわずか十分の一というから、⁽²²⁾それまで内郡での行使は禁止されていたことが推測できる。滅亡前には鉄銭が首都に流入するとともに銅銭との等価関係も維持されなくなった。銅鉄銭の等価関係、行使地域の維持は国家の規制力に基づくため、国力が衰えると民間市場の論理が勝ることになるからである。なお大蜀通宝・三種の広政通宝ともに残存量が少ないことから見て、後蜀の鑄銭事業は前蜀と比較すると、かなり後退し盛んではなかったようである。

以上のように後蜀では銅銭鑄造が落ち込み、銅銭の流出防止のため鉄銭を導入した結果、銅銭専一体制の維持はできなくなった。かくて前蜀以来、華北王朝とあわせ一つであった通貨圏から四川は分離することとなった。だが鉛銭を官鑄の基本に置く東側の楚に対しては(後述)、異なる通貨圏を維持したので、中国全域で見ると、四川は九五〇年代半ば以後、孤立の度合いを強めたと言える。四川を他の地域から切り離すという北宋の通貨制度のもとにはここにある。

(3) 呉越・閩・楚は鉛の小平銭が鑄造されたことで共通する。銭名は開元通宝である。

まず浙江の呉越(九〇七―九七八)は鎮海軍節度使錢鏐が後梁から王号を認められて成立し、一時独自の年号を定めたことはあるが、おおむね中原の五代王朝の年号を使い、みずから一段低く位置づけた。史書には銅銭を「唐制の如く」鑄造したことが見えるように、⁽²³⁾呉越の基本通貨は銅銭であった。ところが王朝の半ば開運三年(九四六)鉄銭の鑄造が検討され、結局とりやめられたことがあった。このとき忠懿王俶の弟弘億が鉄銭の害を八か条列挙した。

王の弟弘億諫めて曰く、鉄銭を鑄るは八害有り。新銭既に行い、旧銭皆な隣国に流入するは一なり。吾国に用

う可くして、他国に用う可からざれば、則ち商賈行かず、百貨通ぜざるは二なり。銅禁至つて嚴にして、民猶お盜鑄す。況んや家に鑄釜有り、野に鑄^{*}犁有るをや。法を犯すこと必ず多からんは三なり。閩人鉄錢を鑄て乱亡す、法と為すに足らざるは四なり。国用豊なるを幸うも而して自ら空乏を示すは五なり。禄賜常有るも而して故無く之を益し、以て厭う無きの心を啓くは六なり。法変じて弊あるも、遽に復す可からざるは七なり。錢は国の姓、之を易うるは不祥なること八なり。王深く之を嘉して乃ち止む。〔吳越備史〕卷三、開運三年）

* 鑄は四庫全書本による。

第一条の新錢は鉄錢、旧錢は銅錢である。鉄錢を投入すると銅錢が隣国に流出するという。開運三年は南唐が閩を滅ぼした直後にあたり、吳越は周圍を南唐に囲まれていた。隣国とは銅錢を基本通貨とする南唐が主として意識されている。吳越と南で接する旧閩国地域は後述するように鉛錢地域である。このように周圍に鉄錢地域が存在しない状況にあつては、鉄錢は自国内で通用するだけで対外的に機能せず、かえつて銅錢の隣国への流出を促すことになると予測されている。吳越は第三条にあるように嚴格な銅禁政策を実施しており、銅錢經濟の堅持を重視していた。これを破壊する鉄錢の導入は見送られたのである。

このように吳越が銅錢の鑄造を重視したことは明白なのに、現在に至るまで吳越の銅錢として認定されたものはなく、鑄造量の多少を知る手がかりはない。史書に記録されながら実物の存在が不明というのは不思議だが、おそらく「唐制の如く」鑄造したと言われることと関係するだろう。つまり唐代と同じ仕様で開元通宝を鑄造し、その結果、現在まで残存したとしても唐の開元通宝と認定されてしまうのではないかと私は推測する。

なお、顯徳四年（九五七）「始めて鑄錢を議した²⁴」という記録がある。時期が王朝末期にあたることを勘案すると、鉄錢の鑄造を開始したことを伝えた記事ではないかとも思われるが、出土が伝えられておらず判明しない。

また記録には見えないが、吳越では銅錢とは別に開元通宝を錢名とする鉛錢を鑄造した（図7）。一九八〇年代

以後浙江各地で出土が相次いだ。それは錢徑一九〜二三mm、一・一〜三gの小型で規格性の乏しいものであり、閩・楚・南漢の鉛開元通宝とは製作が異なることから呉越の錢貨と確定したのである。呉越が銅錢經濟を重視したことから、鉛開元は私鑄錢である可能性があり、また銅錢との比価も全く不明である。

呉越が銅の小平錢を鑄造したのに対し、閩と楚は鑄造しなかった。福建の閩（九〇九—九四五）は、威武軍節度使王潮が基礎を築き、弟の審知が後梁から王に封じられて成立した。やがて龍啓元年（九三三）帝号を称したが、内訌から分裂し一時股が成立した（九四三—九四五）。閩でもっとも多い錢貨は開元通宝鉛錢である。鉛錢には大錢と小平錢（図8）の二種類があり、貞明二年（九一六）王国のとき開鑄された⁽²⁵⁾。背にある閩または福の字は、国号と福州大都督府を表している。

次に開鑄時期の早いのは開元通宝大鉄錢（図9）で龍德二年（九二二）である。背に閩あるいは殷の国号を記す大鉄錢の幣値の記録はないが、五百文で一貫とするとある⁽²⁶⁾。これが意味する内容は三通り想定できる。一つは大鉄錢五〇〇文⇨小鉛錢一貫であり、この場合は小鉛錢に対して折二錢ということになる。二つは大鉄錢五〇〇文⇨唐の開元通宝銅錢一貫で、当時流通界に存在した開元通宝銅錢に対する折二錢である。三つは五〇〇文を一貫と計数する短陌（五〇陌）の場合である。私は開元通宝大鉄錢が三八〜四四mm、二二〜三二gもある大型であることから一番目の可能性はなく、また財政上五〇陌というのも極めて異例と考えるので、二番目の可能性⁽²⁷⁾、すなわち開元通宝銅錢に対する折二錢である可能性が高いように思われる。そして、大きさから見て小鉛錢に対しては当十であったと見做してよいだろう⁽²⁸⁾。つまり「開元通宝小鉛錢一〇文⇨開元通宝大鉄錢一文⇨開元通宝銅錢二文」と考える。閩では鉛錢と銅錢の比価は五対一で、後述の楚や南漢の一〇対一と比べると鉛錢が高い。なお開元通宝大鉛錢は、錢徑三六〜三九mm、重さ一二〜三三gで、大鉄錢とほぼ同じ大きさであり、大鉄錢と等価であったと思われる。

永隆通宝（鉄銭）・天徳通宝（鉄銭）・天徳重宝（銅銭と鉄銭）はいずれも王朝滅亡前の年号銭の大銭である。これらの大銭の幣値について永隆大鉄銭は当十という記録⁽³⁰⁾（永隆元年 九三九）と鉛銭百に当たるという記録⁽³¹⁾（永隆四年 九四二）、天徳大銭は当百とする記録がある⁽³²⁾（天徳二年 九四四）。永隆大鉄銭の当十と当百の二つの記事をどのように整合的に理解したらよいかが問題である。記事に三年の差があること、滅亡前年の天徳大銭が当百であることを考慮すると、私は王朝末期の財政問題が背景にあると見るのがよいと思う。つまり永隆大鉄銭は始め当十（鉛銭に対する当十）としていたのを当百に改め、天徳大銭は当初から当百として投入されたと考えるのである。しかも永隆銭は錢径約四〇mm、重量約二五gであるのに対し、天徳銭は約三四mm、約二三g（銅銭）と約一五g（鉄銭）で、あとに出た天徳銭がいつそう減重しているのも納得できる。

以上のように閩の通貨には前代の銅銭が残存するうえに、独自の通貨として鉛銭・鉄銭があつたが、基準となるのは鉛の小平銭であり、当百のような大銭は王朝最末期のもので特殊なものである。銅銭は最末期の天徳重宝のほかは铸造せず、唐の開元通宝が残っていただけで、あまり流通していなかったと思われ⁽³³⁾。北宋の福建では鉄銭が流通したが、それは五代十国時代の状況を引き継いだものである。

湖南の楚（九〇七―九五二）は武安軍節度使の馬殷が楚王に封じられて建国、南唐に滅ぼされるまで続いた。独自の年号を使ったことはなく、五代王朝や南唐の年号を用いた。楚が铸造した錢貨として知られているのは、天策府宝（銅銭・鉄銭）・乾封泉宝（銅銭・鉄銭）・乾元重宝（銅銭）という大銭と開元通宝鉛銭（小平銭）である。天策府宝は、王号を与えられた際、天策上將軍に封じられたことに因んで铸造したといわれるが、背に天策・天府・天・策の錢文を有する乾封泉宝もおそらく同様であろう。

大銭の現存量は乾封泉宝が比較的多いだけで、天策府宝・乾元重宝は極めて少なく、とくに銅の大銭は少ないこ

とから、これら銅鉄の大銭の鑄造量は少なく、通貨としての意義も小さいと思われる。乾封泉宝について見ると、銅銭が錢径三四・四mm、重さ三〇・九・四〇・八g、鉄銭が四一・四五mm、二七・五・四八・五gある大型の錢貨である。最も大量に鑄造した錢貨は鉛の開元通宝で、錢径二一・二五mm、二・二・四・九gと幅があるが、比較的大きなものが多い。

これら楚国が鑄造した錢貨は、天策府宝以外、唐の錢名を用いた錢貨を鑄造して独自の錢名を創案しなかったこと、銅鉄の錢貨はいずれも大錢であつて小平錢を鑄造しなかったことが注目される。流通した錢貨については、唐の開元通宝が通用していた状況を楚がそのまま継承したことから、乾封泉宝大鉄錢(図10)、鉛の開元通宝小錢(図11)、唐の開元通宝の三種類であつたと推定できる。

この三種の錢貨の關係と、そこから窺える錢貨流通の状況はどうであろうか。いくつかの史料が残されているが、錯綜しているので一括して提示しておこう。

A 『資治通鑑』卷二七四、同光三年

初め楚王殷既に湖南を得、商旅に征せず、是に由つて四方の商旅輻輳す。湖南の地鉛鉄多く、殷、軍都判官高郁の策を用い、鉛鉄を鑄て錢を為る。商旅境を出て、之を用いる所無く、皆な他貨に易えて去る。故に能く境内餘す所の物を以て天下の百貨と易え、国以て富饒す。湖南の民、桑蚕を事とせず、郁民の輸税する者に命じ、皆な帛を以て錢に代え、未だ幾くならずして、民間の機杼大いに盛んなり。

B 『資治通鑑』卷二七六、天成四年四月庚子朔

鉄錫錢を禁ず。時に湖南専ら錫錢を用い、銅錢一は錫錢百に直す。中国に流入し、法禁ずる能わず。

C 『旧五代史』卷一三三、馬殷伝

(馬殷) 既に楚王に封ぜられ、……又た自ら鉛鉄錢を鑄る。凡そ天下の商賈齎す所の宝貨の其の境に入る者は、祇だ土產・鉛鉄を以て之を博易して餘す無し。

D 『新五代史』卷六六、楚世家、馬殷

(高) 郁又た殷に諷して鉛鉄錢を鑄さしめ、十を以て銅錢の一に當つ。

E 『泉志』卷五、乾封錢、所引『湖南故事』

馬殷鉄冶を置き、大錢を鑄る。六寸可りの圜、重さ銖兩に非ず、九文を用いて貫と為す。文に乾封泉宝と曰う。其の文乾を上たつび、其の数九を上たつぶ。遂に通用す。

F 『泉志』卷五、乾封錢、所引『十國紀年』楚史

馬殷始めて鉛錢を鑄、城中に行い、城外は即ち銅錢を用う。賈人鉛錢を銷し、持ちて江北を過ぐることも多し。高郁鉄錢を鑄んことを請う。圜は六寸、文に乾封泉宝と曰い、一を以て十に當つ。錢既に重厚にして、市肆券契を以て指塚交易す。

記事Bには初め鉄錫錢、あとに錫錢とある。錫錢は存在が知られていないので、錫錢は鉛錢のことであろう。鉄鉛錢は鉄錢と鉛錢であり、低品位の金屬貨幣を言つたものと思われる。後唐がとくに禁じたのは南方から来る鉄錢・鉛錢等の私鑄錢であるが、楚の官鑄鉛錢もこれに加えられた。鉄の大錢は鑄造額が多いとは思われないから、後唐が禁令の対象として意識したかどうか疑問である。湖南では錫錢(鉛錢)が専ら用いられるとあるように銅錢・鉄錢より鉛錢が普通に見られる錢貨である。

馬殷が建国当初鑄造した大鉄錢は前述のように天策府宝と乾封泉宝である可能性が高い。EFには乾封泉宝の錢名が見える。またFによると乾封泉宝を鑄造する以前に鉛錢の存在が知られる。ACDによると、鉛錢と大鉄錢が

同時鑄造のようにも見えるが、實際は鉛銭の鑄造が少し早かったとしても同じ表現になるに違いない。

問題はD Fに見える比価である。Dでは銅銭一文Ⅱ鉛鉄銭一〇文であるが、銅銭一文Ⅱ鉛銭一〇文はよいとして、銅銭一文Ⅱ鉄銭一〇文が成立する鉄銭とは、大鉄銭であるはずがない。ところが現在小鉄銭の存在は知られていない。疑問の残る記事だが、鉛鉄銭は實際のところ鉛銭のみを意味したと思われる。すなわち銅銭一文Ⅱ鉛銭一〇文の比価が存在したと考えられる。

Fは大鉄銭一文Ⅱある錢貨一〇文である。大鉄銭が当十の対象とするある錢貨が鉛銭だとすると、直前で記したように銅銭一文Ⅱ鉛銭一〇文であるから、大鉄銭と銅銭は等価であるという結果になる。それは大鉄銭の大きさから判断して無理である。結局のところ大鉄銭一文Ⅱある錢貨一〇文は、大鉄銭一文Ⅱ銅銭一〇文である以外に候補がない。要するにこれら二つの記事をあわせると、唐の開元通宝に大鉄銭と鉛銭が加わった比価は、「大鉄銭一文Ⅱ銅銭一〇文Ⅱ鉛銭一〇〇文」だと判断できる。

この等式を別の面から傍証するのはEの、大鉄銭九文を一貫としたという記事である。一貫は基準の錢貨による計数に違いないが、銅銭か鉛銭のいずれかである。前述の「大鉄銭一文Ⅱ銅銭一〇文Ⅱ鉛銭一〇〇文」が成り立つなら、大鉄銭一〇文Ⅱ鉛銭一〇〇〇文の基本式のうえに、實際は大鉄銭九文（鉛銭九〇〇〇文）が一貫と計数されることになり、楚では九〇陌の短陌が行われていたと考えればよい。そしてまた楚の価格計算の基準であつたのは鉛銭であることも判明する。ところでBに銅銭一文Ⅱ錫銭（鉛銭）一〇〇文とあるが、これは上記の考証にどうしても合わない。誤りがあると思う。

Fの記事の前半部分に、城中は鉛銭、城外は銅銭を使うとあり、商人は鉛銭を銷溶して江北すなわち中原方面に持ち出したという。城内外で鉛銭、銅銭地域を区別することは、後述する南漢と同じである。ただし南漢と異なる点は、鉛銭の城外持ち出しは自由か、もしくは禁令があつても緩やかであつた結果、商人が銷溶した鉛銭を持ち出

することができたと思われることである。ここで銷溶した鉛銭を国外に持ち出したというのは、銅銭一文＝鉛銭一文という大きな差のある比価があり、銅銭で大量の鉛銭を入手できたからであろう。

楚国における鉛銭が安く銅銭が高い状態は、Aにあるように商税を徴収しなかったこともあって、他国とくに華北の五代王朝や南唐から銅銭をもって楚国に買いつけに来る商人にとって有利に働く。つまり楚の華北に対する輸出振興に寄与する比価が開元通宝銅銭一文＝鉛銭一〇文の關係なのである。⁽³⁵⁾このような価格体系が国初鉛銭導入の時点で決定されたことは前述した。

Aの「初」以下「鑄鉛鉄為銭」までは国初のこと、「故」以下は同光三年（九二五）の時点までのことである。楚の通貨政策は十数年間にかんりの成果をあげたという。この記事で、商人は鉛鉄銭でなく他貨を持ち出すとし、Cは土産鉛鉄を支払手段とし、Fは銷溶した鉛を持ち出すとして一致しないが、鉛銭を銭貨の形態で国外に持ち出さなかったとする点では一致する。しかし華北の五代王朝に鉛銭流入の記事も多いことから、鉛や他の商品だけでなく鉛銭のまま国外に持ち出したことも当然あつたはずである。銭貨のまま国外に帯出しないというこれらの記述は、五代王朝の正式の通貨が銅銭で鉛鉄銭は非合法であることから、王朝間で合法的に交易する商人の活動を述べたものと解すればよい。

(4) 南漢（九一七―九七二）も鉛の小平銭を発行した。呉越・閩・楚と異なるのは、乾亨重宝を銭名とするものが多く、開元通宝は少ないことである。南漢は清海軍節度使劉隱が自立して始まり、その弟劉龔が帝を称し、国号を大越さらに大漢（南漢）と改めた。乾亨通宝（図12）と乾亨重宝は年号銭（乾亨は九一七―九二五）で、通宝は銅銭、重宝は銅銭のほか鉛銭がある。ただし改元しても銭名を変えることはなかった。出土例では鉛の乾亨重宝が突出して多く、銅銭は少ない。南漢を通じてほぼ鉛銭だけを鑄造したと推定できる。年号銭・小平銭という組み合わせ

せは、この時代の帝国の通例である。違うのは鉛銭が主流であつたことである。

乾亨重宝鉛銭（図13）は財政困難を背景として鑄造され、鉛銭一〇文が銅銭一文に相当した。興味深いことは、乾和（九四三―九五八）以後、鉛銭は城内用、銅銭は城外用とし、城内外における銅銭・鉛銭の出入を、死罪をもつて許さなかつたことである。³⁶ 乾亨重宝鉛銭の記録を残した南宋の洪遵は「余、嶺外に抵り、始めて此の銭を獲。銅銭の若し。今世存する所至つて多し」と言う。³⁷ この銭は大量に鑄造されたにもかかわらず、南漢の領域から外に出ることは殆どなかつたようであり、禁令の厳しさが窺える。城内用とは都市用・商人用、城外用とは農村用・農民用であると概ね言えるだろうが、このように截然と区別すると、都市・農村間の物資の移動の障礙となることは明らかである。こうして都市と農村を分断する政策がとられたが、南漢商人が他国に商品を仕入れに赴くときにも困難をとまなつたに違いない。

鉛銭の残存量が非常に多いのは都市・商人用だからである。また農村人口が全人口の八〇％ぐらいを占めると推定されるにもかかわらず、³⁸ 城外用の乾亨通宝・乾亨重宝銅銭の残存が極めて少ないのは、農村に官銭の投入が殆どなされなかつたことを示している。都市・農村間の銭貨浸透度の落差の非常に大きいことが理解できる。

南漢にも開元通宝（図14）・乾元重宝・五五等の鉛の小銭がある。出土が桂州古城（広西省桂林）だけに限られており、南漢王朝のなかの地方通貨と考えられている。乾亨重宝鉛銭と同様、城内用の銭貨だつたと思われる。これらは製作の粗末な小さめの銭で、銭文の多様性のほか、錢径二三mm前後と二〇mm前後を中心として大小二種類がある。これらの桂州鉛銭は背に金・南・宝・興等の字と数字のあるものが多い。

南漢の銭貨はこのように農村にはあまり普及せず、都市部に鉛銭が集中したが、移動に困難がつきまとう以上、銭貨を媒介にして都市相互の経済関係を結ぶこともあまりなかつたと思われる。さらに銭貨から見ると南漢は他の王朝からやや孤立しているように見える。

錢貨が都市と農村、都市と都市、南漢と他国を繋ぐことが困難である以上、それに代わるものが必要である。史料で確認するのは難しいけれども、おそらくそれは銀であったと思われる。広東西は唐代から金銀が貨幣として用いられていたことは周知のことである。³⁹ 南漢における錢貨の役割は他の王朝と異なっていたようである。

(5) 江南の大国、南唐（九三七—九七五）は、呉を倒した徐知誥が大唐帝国の復興を掲げて帝位についた王朝である。呉が独自の錢貨を鑄造しなかったため、南唐の領域でははじめ唐錢と私鑄の鉛錢・鉄錢が流通していたと思われる。南唐の錢貨は大小各種、鉄錢と鉛錢もあつて多様だが、現存量が多く、広く流通したと推定できるのは、銅の小平錢、すなわち閩縁篆書の開元通宝（いわゆる南唐開元）（図15）・大唐通宝・唐国通宝である。南唐の錢貨は、唐の復興を掲げたとおり、開元通宝と唐という国名を錢名にもつ錢貨である。銅錢・小平錢・国号錢という特徴のセットは、華北の五代王朝や四川の前後蜀の錢貨鑄造と共通するところであり、南方の帝国たるに相応しいものといえる。

しかし交泰元年（九五八）後周の世宗に江北を奪われると帝号をやめ、後周の年号（顯徳）と正朔を奉じて後周に隸屬し、後周の滅亡後はそのまま宋朝に隸屬した。しかも塩の産地を喪失したから財政は悪化し国威は衰えた。南唐の財政が悪化した顯徳六年（九五九）、永通泉貨当十錢（吉語錢）と唐国通宝二当一錢（錢子という）を発行した。どちらの幣値も開元通宝を基準とする。⁴⁰ 永通泉貨は銅鉄二種のある、財源捻出のための大錢であるが（図16）、五か月ほどで廃止され、現存は少ない。⁴¹ 永通とはもちろん南唐の永統を祈る文言である。

興味が惹かれるのは、二個で開元通宝一文に相当する唐国通宝の二当一錢の存在である（図17）。錢径二〇mm前後、一・五×二・二gと小型の錢貨である。⁴² 永通泉貨がすぐに廃されたのに対し、この錢は引き続き鑄造されて大量に残っており、南唐の後半期、すなわち江北を喪失し後周・宋に従属した時期に重要な役割を果たしたことが窺

える。小平錢の半分の幣値をもつ錢貨を鑄造する意義は、それと同じ価値をもつ錢貨が出まわり、この錢貨を官錢と同じ扱いにし、財政に寄与させることでなければならぬ。

つまり唐代以来、江淮（南唐の北部）は私鑄の鉛錢・鉄錢が広く流通した地域であつたこと、南唐を囲む呉越・閩・南漢・楚は鉛錢・鉄錢が流通した王朝であり、当然国境を越えて流入したはずであることと関係する。さらに南唐は九四五年に閩を併合したので、閩と南唐の通貨の混交は速度を早めることとなり、楚も九五一年に滅んで以後、群雄勢力の割拠のもとで統一的な通貨政策は不可能となり、南唐や後蜀との通貨の交じり合いが生じることになったはずであることも関係する。

これらの鉛錢・鉄錢の製作の程度は多様だが、比較的よいものを国家認定の通貨としたのではないかと私は推測する。「周辺王朝および私鑄の鉛錢鉄錢二文 \parallel 唐国通宝二当一錢二文 \parallel 開元通宝一文」の等式を成立させるための錢貨が唐国通宝二当一錢だと考えるのである。

なお南唐は建隆四年（九六三）、鉄錢の開元通宝（小平錢）を発行した。はじめこの鉄錢は銅錢と等価で当二錢とされた。すでに廃止されていた永通泉貨当十錢は銅の開元通宝に対する当十であつたが、鉄開元が銅の開元通宝に対して当二であるとは想定しにくい。同じ素材の鉄錢あるいは民間で流通する鉛錢に対しての当二と考えるのが自然である。そうすると銅錢と等価であり、かつ当二錢というのは、顯徳六年に開鑄した唐国通宝二当一錢と同様、民間で流通する私鑄の鉛錢・鉄錢を認めたものということになる。しかしその後民間では銅錢が減少して銅錢相場は高騰し、滅亡のころには（九七五）、銅錢と鉄錢の比価は一对一〇となつた。⁽⁴⁵⁾銅錢の高騰とともに、唐国通宝二当一錢一文 \parallel 周辺王朝および私鑄の鉛錢・鉄錢一文の關係も崩れたことであろう。唐国通宝二当一錢が意味をもつたのは九五九年から数年間のことと思われる。

なお太平興國二年（九七七）江南転運使樊若水の上請によつて、旧南唐領に銅錢を大量に放出する一方、鉄錢を

回収して農器を鑄造し、江北の流民に与える政策がとられた結果、江南の鉄銭は姿を消したと言われる。⁽⁴⁶⁾ 南唐ではその末期、鉄銭地区化しかけたが、宋初銅銭地区に回帰した。

(6) 幽州を根拠地とする盧龍軍節度使劉守光が後梁から王に封じられ、ついで帝を称した燕は、その父劉仁恭と二代あわせて一九年間（八九五—九一三）政權を維持した。この間鑄造された銭貨は、銭名だけで一〇種、銅鉄を区別すると、少なくとも一七種が知られており、南唐と肩を並べる。しかし残念なことに、史書には、劉仁恭が泥銭をつくったこと、銅銭を集めて山中に隠したこと以外、銭貨に関する記事は見当たらない。⁽⁴⁷⁾ それ故かつて劉父子の銭がどのようなものであるかはつきりしなかったが、北京居庸関付近の大王山から多種類の銅銭がまとまって出土したことにより、⁽⁴⁸⁾ はじめて確定した。

このような事情のため、劉父子の政權のいつごろ、どの銭貨が鑄造されたか、まったく不明である。ただ銭名から、応聖元宝（当十）、乾聖元宝（当百）、応天元宝（当万）の三種だけが、おそらく劉守光が帝を称し応天と改元した九一年のことと推定できるのみである。盧龍軍節度使時代のものか燕国時代のものか確定できないけれども、その銭貨の特徴をまとめてみよう。

まず年号銭は当万の応天元宝一種のみである。その他の銭名は、応聖・乾聖・永安・順天という吉語と五銖・貨布である。帝を称したのは二年ほどであるから、応聖・乾聖・応天の三種以外は、帝を称する以前の銭貨、とくに節度使時代のものである蓋然性が高い。ところが燕の銭貨には節度使に任じた唐や後梁の年号が存在しないし、開元通宝の鑄造も知られていない。他の五代十国王朝の銭貨に見られる傾向を窺うことができないのである。君主にあたる上位の強大な王朝から距離をおいた独立色の濃い節度使といえる。

次に、永安の一十・一百・五百・一千（図18）、順天の一十・一百・一千、応聖（当十）・乾聖（当百）・応天

(当方) といった巨大な幣値をもつ貨幣体系となつてゐることである。これに似た体系をもつのは、王莽錢と孫吳の錢であるが、整然たる体系を乱す貨布三百(図19)のような錢貨のあることから、燕の通貨体系は、自らの理想の実現をはかうとした王莽でなく、軍費の獲得のために巨大幣値の錢貨をつくつた孫吳に近い⁽⁴⁹⁾。

また燕は王莽の貨布や隋の五銖をそのまま母錢として利用し鉄錢を鑄造した。母錢の製作に時間と手間をかけない簡便な鑄造からは、とにかく急いで鑄造したらしいことが窺える。泥錢の製作といい、その場しのぎ、手あたり次第という感じの錢貨鑄造であるが、国内用であつて他国との連携はない。他国との經濟關係は銅錢を重視したことから分かるように唐の開元通宝であろう。

(7) 十国にはこのほか吳・荆南・北漢がある。前二者は自国の錢貨を鑄造しなかつたとされる。江南の大国の吳(九〇七—九三七)は、天復二年(九〇二)淮南節度使楊行密が唐朝から吳王に封ぜられたのに始まり、唐滅亡後も唐の年号を用いた。武義元年(九一九)独自の年号を立て、乾貞元年(九二七)帝國となつた。王国・帝國の三〇年間を通じて中原の王朝に従属しない独立の王朝でありながら自国の錢貨を鑄造しなかつたとされるのは不思議である。その理由は、鑄錢の記録が全くなく、しかも伝世・出土の実物の錢貨に吳の国名や年号をもつものがないからである。あるいは記録が失われただけかもしれないが、今は知りようがない。

しかし留意しておかなければならないのは、吳が唐を繼承する王朝であることを自認していたことである。仮に吳が鑄錢事業を行つたとしたら開元通宝の可能性が高い。しかし吳をついだ南唐のように篆書の開元通宝ならともかく、唐錢の書体であれば現在では区別が難しい。また吳の領域は、唐代から華北一帯に流入した鉛鉄の私鑄錢鑄造の中心地の一つであり、後唐・後晋のときもそうであつた。私鑄の鉛鉄開元通宝は華北に流出しただけでなく、吳国内でも普及したはずである。おそらく吳国では唐以来の開元通宝や乾元重宝といった唐錢と民間盜鑄の鉛錢・

鉄銭の開元通宝がともに流通していたことと思われる。

湖北の荆南（九〇九—九六三）は、荆南節度使高季興が後梁から王に封じられたのに始まる。わずか三州を領有するだけの小国であるけれども要衝の地を占めていた。そして大国の間に挟まれながら、というより挟まれていたがゆえに緩衝地帯となり、長い命脈をたもった。⁽⁵⁰⁾ 荆南はおそらく銭貨を鑄造しなければならない動機と国力をとものに欠いていたと思われる。

山西の北漢（九五—九七九）は、後漢がいったん滅んだあと再興した王朝である。鑄銭に関して、唐制で鑄造したとされるけれども、⁽⁵¹⁾ 実物で確認できない。この場合の唐制とは必ずしも開元通宝とは限らないだろう。銭料例・銭径・重量を唐制にならったのかも知れないからである。むしろ北漢の成立事情や、後漢がわずか四年で滅びたにしては漢元通宝の現存量が多い事情を考慮すると、北漢が鑄造したのは漢元通宝であるほうがふさわしい。

十国に数えないが、陝西の鳳翔節度使李茂貞が唐から岐王に封ぜられて成立した岐（九〇一—九二四）がある。岐は唐の正朔を奉じ、銭貨も鑄造しなかった。

三 五代十国時代の通貨圈

以上、五代十国時代の各王朝の銭貨を概観した。各国で異なる通貨事情は、分裂的・封鎖的と見えながらも、地域によっておおまかな傾向のあることが見て取れる。しかしこの傾向を見る前に、確認しておかなければならないことがある。我々は五代十国の個別の通貨事情に目が奪われがちであるが、この時代は唐代をうけつぎ、基本的に開元通宝や乾元重宝という唐銭がほぼ中国全土に普及していたことを忘れてはならないのである。すなわち中国は全土で共通の通貨をもっており、五代十国が閉鎖的な経済圏に分裂していたということはありえない。五代十国特

有の分裂した通貨圏は、唐代以来の全土にわたる共通の通貨圏の上に重なった層と見るべきである。さらに唐後半期はとくに江淮地方で鉛銭・鉄銭・鉛錫銭等の私鑄銭が鑄造され華北に流入していた。このことも五代十国時代の通貨事情の前提となる重要な事実である。

さて華北の五代王朝・前蜀・北漢は、唐代の開元通宝銭と大きさがほぼ等しい銅銭だけを発行した（ただし後晋は民鑄を許したので小型の天福元宝が多い）。銅銭・小平銭・年号あるいは国号銭の三つの要素を具えたことで、華北王朝の領域と前蜀の四川は全体として一つの通貨圏を構成し、国際間の通商に何ら支障は生じない。岐は独自の銭貨を鑄造していないものの、前の王朝の銭貨を継承しているから、この通貨圏に加えてよい。燕は他の王朝とまったく異なる銭貨を鑄造したものの、その量は少なく、また早くに滅んだので、この通貨圏を攪乱するような影響は全くなかった。

その一方華北には私鑄の鉛銭・鉄銭が江南から大量に流入し、銅銭と二元的構造を形成した。銅銭は正式の通貨であり、租税納入等国家の支払手段、国家間の交易の手段等の公経済領域、民間市場での私経済領域いずれの局面でも通用するが、私鑄の鉛銭・鉄銭は私経済領域でしか通用しない。こうした通貨の二元的構造が解消されるのは宋初、十世紀末のことである。^②

呉は独自の銭貨を発行しなかったようだが、唐銭が使われる点で、華北王朝の通貨圏に加えてよいかも知れない。しかし一方で鉛銭・鉄銭の私鑄が盛んな地域でもあり、これらの鉛銭・鉄銭の方がむしろ広く使用されていた可能性もある。

鉛銭が大量に流通したのは、呉越・閩・南漢といった東南海岸部の王朝と楚である。あるいは呉・南唐の領域を除く長江以南と言ってもよい。呉越は、国家制度としては銅銭体制である可能性が高いと思うが、時期は判明しないが鉛銭が流通するにいたった。呉越が地理上華北の五代王朝と東南の閩・南漢の中間に位置するのに対応するが

如く、通貨事情も銅錢優位の華北と鉛錢優位の東南の交わる様相を示す。

閩と楚は九二五〜九三〇年前後から鉛錢を導入し、やがて鉛錢を主要な通貨とした。銅錢と鉛錢の比価は、閩では一對五、楚では一對一〇を公定し、鉛錢を価格計算の基準とした。南漢も九二〇年前後に鉛錢を導入して主要な通貨とし、銅錢一文⇨鉛錢一〇文の比価を定めた。吳越・閩・楚の鉛錢は錢名が開元通宝で共通し、大きさもほぼ同一である。このような共通点は、銅鉛錢比価が閩楚のように共通でない事情はあるものの、国境を越えた共通の貨幣になりうるものである。これに対し南漢は、同じ鉛錢地区といっても、乾亨重宝という大きめの年号錢を鑄造し、また厳しい錢貨持ち出しの禁止を實行したように、他の三国から少し離れていた。

吳越・閩・南漢・楚は、この順序で時計回りに、吳のち南唐の東南西を囲んでいる。南漢が両隣の閩や楚と距離を置くとしたら、国境を接しない内陸の楚と海岸部の吳越・閩は異なる通貨圏を構成していたのだろうか。閩と楚の通貨体系は、銅鉛錢比価が異なる以外は、鉛の小平錢・鉄の大錢・唐の開元通宝で構成される点がよく似ている（閩では唐の開元は少ないようだ）。この二国が相互に影響を及ぼすくらい緊密な關係にあつたと想定できるだろう。やや孤立的な南漢を通り抜けて及ぼす影響のほか、吳・南唐の北部にあたる長江流域・江淮地方に広まった鉛錢地域が錢貨流通の通路になっていたと考えられる。要するに、吳越・閩・楚・南漢は鉛錢に着目した一つの通貨圏であり、そのなかで南漢はやや孤立的と見てよいだろう。そして十世紀半ば閩と楚が滅亡すると、南唐の領域に両国からの鉛錢の流入が加速したと思われ、長江以南の地は、南唐の領域が依然として銅錢優位でありながら、全体として一つの鉛錢通貨圏の形成に向かつていたのではないかと思う。

南唐は九五八年まで銅錢を主要な通貨として維持しようとした。しかし周囲からじわじわ鉛錢や鉄錢が流入する状況が生まれていた。さらに江北を失って財政難に陥ると、鉄錢を導入したほか、鉛鉄の私鑄好錢や官鑄錢を銅錢にリンクするための銅錢、唐国通宝二当一錢を発行した。唐国通宝二当一錢は、自然の成り行きにまかせれば変動

する銅銭と鉛鉄銭の比価を一对二に固定し、国家の正規の通貨に認める手段であると思われるが、大きく見れば華中南の鉛銭・鉄銭を銅銭と繋ぐものであり、銅銭地域が華北に広がる以上、華北と華中南を繋ぐものともなる。

五代十国時代の銭貨の特徴の一つは大銭が多いことであると言われる。燕の大銭は極端な例外であるから除外して考えると、大銭といえは長江以南の銭貨ということになる。しかしその江南にしても南唐の大銭は当十まで、しかも銭体自体も割合に大きく、発行は少なかった。閩の大銭は滅亡前の非常時に当百という大きな幣値のものをつくつたが、それまでは当十までで、しかも銭体が大い。楚の銅鉄の大銭は唐以来の銅の小平銭に対して当十であり、鉛銭を基準として以後当百になったものである。しかも大銭の鑄造量は少なかった。

つまりこの時代の社会経済に対する大銭の意義は、あまり大きくはなかったと言え、大銭の存在を強調する必要はない。銅銭にせよ鉛銭にせよ、小平銭が財政運用、経済生活の手段として機能した。長江以南の諸王朝の大銭をふくむ銭貨は銭名の多様性・素材金属の多様性で目立つが、実質の差は見かけほど大きくはなかったと言える。要するに華北の銅銭通貨圏と江南の鉛銭通貨圏があるが、華北には江南からの私鑄鉛銭の流入で二元構造が形成され、江南では唐以来の銅銭のほかに官鑄の鉛銭が加わり、やがて銅銭よりも優位に立つて計算の基準となった。どちらの通貨圏も銅銭と鉛銭が流通したことで共通し、異なるのは華北が銅銭優位で、江南では鉛銭が優位に立つ点と、鉛銭は華北で非合法、江南で合法という点である。⁽³³⁾

このような二つの通貨圏の存在は九三〇年ごろ明確なものとなったが、九六〇年ごろ南唐の二当一銭の登場によって、二つの通貨圏は密接に繋がることとなったのである。通貨圏としては後蜀と南漢だけが独立の要素が他国よりも強かった。

開元通宝という全国共通の通貨圏の上に、華北の銅銭通貨圏と江南の鉛銭通貨圏が重なり、さらにその上に各国独自の銭法で区別される通貨圏が重なっていたというのが五代十国時代における通貨圏の様相である。

結 語

本稿を終えるにあたって銀について触れておきたい。宮崎市定は、華中南の王朝は銅銭不足の状況下で、自国産業の保護を目的として鉛鉄銭のような低品位の代用貨幣を生み出したが、鉛鉄銭が自国内でしか通用しない貨幣である以上、国家間の通貨としては金銀絹帛、なかでも銀が使用されたという。見方を変えれば唐代までの銅銭の機能が、低品位の鉛鉄銭と高品位の銀に分解したことでもあるという。確かに銅鉄鉛銭が国際間の通貨の機能を果たさないのであれば、それに代わる決済手段が必要になるだろう。金銀絹帛がその有力な候補であることも確実である。

私は金銀絹帛とくに銀が国際間の通貨として流通したことについて同意するが、その普及に関する評価はやや高すぎるように感じる。氏の努力にもかかわらず、銀が五代十国時代に国際間の通貨として広く使われていたことを示す直接的記述を見いだすのは難しそうであり、むしろ史料上、銅鉄鉛銭が国際間を移動したという記述の方が多いのである。氏の説は氏の構想から必然的に導かれるものであって、もし当時の銭貨について異なる構想から出発すれば、国際間の通貨についてもまた違った状況を想定しなくなる。

はじめに述べたように本稿は、当時の銭貨は、金属の種類に関わりなく、また銭体の文字に関わりなく、国境を越え、時代を越えて通用するものであるとの考えを基本に置いている。同種の金属銭貨がほぼ同じ大きさであるなら、幣値も同じである。銭法は各国で異なっても、同じ素材でほぼ同じ大きさであるなら、他国の銭貨も自国の銭貨も自国のルールで通用させるのである。五代十国時代、銅の小平銭はいうまでもなく、鉛や鉄の小銭・大銭も、鑄造の王朝が違って、通常は大体同じ大きさである。鉛鉄銭が国境を越えることを妨げるものはない。それどころか銅銭の流出は困るけれども鉛鉄銭ならかまわないというのが、当時の王朝の基本姿勢なのである。私は国際間

の流通は、銅鉄鉛銭を媒介とするのが基本であつたと考える。

註

- (1) 私は先に『中国銅銭の世界——錢貨から經濟史へ——』(佛敎大學通信敎育部、二〇〇七年)を公刊し、その第八章「支配の正当性」でこの問題を扱つた。しかしながら間もなく事實の誤りのほか、重要な部分で認識の不十分な点のあることに気づいた。それは唐代の開元通宝の存在を輕視していたことである。この論点を加えると、当該時代の通貨圈に関する認識に変更が余儀なくされる。このことは二〇〇七年九月臺北の國立政治大學で開催された第三屆中國史學會國際學術研討會「基調与変奏 七—二〇世紀的中国」で「五代十國時期的貨幣圈」と題して考え直したものを發表した。しかしそれでもまだ意に滿たない部分があつた。本稿は、このときの發表を基礎におき、再度史料を点検して細部の考証を行い、論文としてまとめたものである。従つて國際學術研討會に提出した論文と、大要は同じであるが違つたものとなつたので、タイトルを少し変更して違ふものであることを示した。
- (2) 宋代(五代十國時代も含める)貨幣史の日本における研究史は、宮澤「日本における宋代貨幣史研究の展開」(『中国史學』一七、二〇〇七年)を参照されたい。
- (3) たとえば劉樊「五代的錢幣」(『食貨半月刊』四一二、一九三六年)。
- (4) 戴振輝「五代貨幣制度」(『食貨半月刊』二一一、一九三五年)。
- (5) 宮崎市定「五代宋初の通貨問題」(『宮崎市定全集』第九卷、岩波書店、一九九二年、所収。初出は一九四三年)。
- (6) 彭信威「中国貨幣史」(第三版、上海人民出版社、一九八八年、初版は一九五四年)。「五代十國的錢幣」三一—六頁。
- (7) 石光韜「十國貨幣制度考」(任爽主編「十國典制考」中華書局、二〇〇四年、第八章)。
- (8) 千家駒・郭彥崗「中国貨幣發展簡史和表解」(人民出版社、一九八二年)。劉精誠・李祖德「中国貨幣史」(文津出版、一九九五年)。
- (9) 中島敏「北宋の錢の重量について」(『東洋史學論集——宋代史研究とその周辺——』汲古書院、一九八八年所収。初出は一九五一年)。
- (10) 宮澤「宋代中国の國家と經濟——財政・市場・貨幣——」(創文社、一九九八年)。第二部第三章「宋代陝西・河東の鉄錢問題」。
- (11) 明代になると、制錢一文＝歷代錢二文という比價が設定されただけでなく、制錢についても鑄造地の違ひによる相場が生じた。
『明史』卷八一、食貨志、錢鈔、弘治元年、

凡納贖收税、歷代錢・制錢各取其半、無制錢即收旧錢、二以当一。制錢者、国朝錢也。

宋応星『天工開物』卷中、冶鑄、錢、

我朝行用錢高色者、唯北京宝源局黃錢与広東高州炉青錢、其価一文敵南直江浙等二文。

(12)

後梁の錢貨として開平元宝大錢、開平通宝大錢、開平元宝鉛錢が知られている。大錢は大ききから判断して元宝は当十(錢径四・三cm、一八・四g)、通宝は当五(三・五cm、一四・一g)とされる。ただし発見が民国にはいつてからであること、史書に記録がないこと、それぞれ一枚しか発見されていないことから、真贋も含めて判断できない。鉛錢の小錢は錢径一七・六mmの非常に粗末な製作でこれも疑問の多いものという。『中国錢幣大辞典』魏晉南北朝隋唐五代十国編『四八六―四八七頁。』

(13) 三宅俊彦『中国の埋められた錢貨』(同成社、二〇〇五年)。一一頁。

(14) 『旧五代史』卷一四六、食貨志、同光二年三月、

知康(唐)州晏駢安奏、市肆間、点檢錢帛、内有錫鐵小錢、揀得不少、皆是江南綱商挾帶來。詔曰、帛布之幣、難以鉛錫、惟是江湖之外、盜鑄尤多、市肆之間、公行無畏。因是綱商挾帶、舟楫往來、換易好錢、藏貯富室、実為蠹弊、須有条流。宜令京城・諸道、於坊市行使錢内、点檢雜惡鉛錫錢、並宜禁斷。

(15)

『新唐書』卷五四、食貨志。
(開元)二十六年、……其後錢又漸惡。詔出銅所在

置監、鑄開元通宝錢、京師庫藏皆滿。天下盜鑄益起、

広陵・丹楊・宣城尤甚。京師權豪、歲歲取之、舟車

相屬。江淮偏鑪錢數十種、難以鉄錫、輕漫無復錢形、

公鑄者号官鑪錢、一以当偏鑪錢七八。富商往往藏之、

以易江淮私鑄者。兩京錢有鵝眼・古文・綫環之別、

每貫重不過三四斤、至剪鉄而縊之。

(16)

『五代会要』卷二七、泉貨、天福三年十一月、

……宜令三京・鄴都・諸道府、無問公私、応有銅

者、並許鑄錢。仍以天福元宝為文、左環読之。委塩

鉄司鑄樣頒下諸道、令每一錢重二銖四參、十錢重一

兩。……

(17)

『五代会要』卷二七、泉貨、天福三年十二月、

先許鑄錢、仍每一錢重二銖四參、十錢重一兩。切慮

逐処缺銅、難依先定鉄兩。宜令天下無問公私、応有

銅処、有鑄錢者、一任取便酌量輕重鑄造。……

(18)

鉛錫錢の禁令からこままでの記述は、宮澤前掲『宋代

中国の国家と經濟』第二部第二章「唐宋時代における銅

(19)

錢の私鑄」による。

『資治通鑑』卷二九二、後周顯德二年十月壬申、

募兵既多、用度不足、始鑄鉄錢、權境内鉄器、民甚

苦之。

(20)

後周顯德二年は後蜀の広政十八年。

『蜀中広記』卷六七、費著『錢幣譜』

孟氏広政間、增鑄鉄錢、於外郡边界參用。每錢千分

四百為銅、六百為鉄。逮至末年、流入成都、率銅錢

(21) 『宋史』卷一八〇、食貨志、錢幣、太平興國五年張諤の言に、

旧用鉄錢千、易銅錢四百。自平蜀、沈倫等悉取銅錢上供。

(22) 前註(20)『蜀中広記』卷六七。

(23) 『文献通考』卷九、錢幣考、

兩浙・河東、自鑄銅錢、亦如唐制。

(24) 洪遵『泉志』卷五、吳越錢、所引『十國紀年』吳越史、

周顯德四年正月、忠懿王俶始議鑄錢。

(25) 『泉志』卷五、鉛錢、所引『十國紀年』閩史、

王審知為閩王。梁貞明元年汀州寧化県出鉛置鉛場。

二年鑄鉛錢、与銅錢並行。

(26) 『十國春秋』卷九〇、閩、太祖世家、

龍德二年 月、鑄大鉄錢、以開元通宝為文、仍以五百文為貫。(陶岳貨泉錄曰、王審知鑄大鉄錢、闊寸

餘、甚纍重、亦以開元通宝為文、以五百文為貫、俗

謂之銚劬、与銅錢並行。勅音賀。)

(27) 唐宋間の財政上の短陌の値は、唐から宋にかけて漸減

する傾向にあるが、宋では七七が標準である。宮澤前掲

『宋代中国の国家と経済』第二部第一章「唐宋時代の短

陌と貨幣経済の特質」。

(28) 開元通宝大鉄錢がかなり大きな錢貨であるにもかかわ

らず、大鉄錢一文⇨銅錢二文であるというのは、少しお

かしいと感じられるかも知れない。しかし北宋初期の福

建で鑄造された太平通宝大鉄錢は錢徑四四mm、三〇gほ

どもありながら、大鉄錢一文⇨銅錢三文にしか当たらな

かった(『続資治通鑑長編』卷二四、太平興國八年一二
月己酉条)。

(29) 『中国錢幣大辞典 魏晉南北朝隋唐編・唐五代十國編』
五六三頁は大きさから当十とみなす。

(30) 『新五代史』卷六八、閩世家、

改元永隆。鑄大鉄錢、以一為十。

(31) 『泉志』卷五、永隆錢、所引『十國紀年』閩史、

王延義永隆四年八月鑄永隆通宝大鉄錢、一当鉛錢百。

(32) 『泉志』卷五、天徳錢、所引『十國紀年』閩史、

王延政天徳二年鑄天徳通宝大鉄錢、一当百。

(33) 報告論文のある五代十國時代の出土例では、福建にお

いて唐の開元通宝は知られていないようである。鄭州師

專中原文化研究所編『錢幣考古文献叙録』(中州古籍出

版社、二〇〇五年)、二七七頁。

(34) 『泉志』卷五、天策錢、

董道曰、馬殷拋湖南八州地、建天策府、因鑄天策府

宝。

(35) 宮崎前掲『五代宋初の通貨問題』五九頁も同意見であ

る。

(36) 『泉志』卷五、(乾亨重宝)鉛錢、所引『十國紀年』漢

史、

劉龔以国用不足鑄鉛錢、十当銅錢一。乾和後、多聚

銅錢、城内用鉛、城外用銅、禁其出入。犯者抵死。

俸祿非特恩、不給銅錢。

(37) 『泉志』卷五、(乾亨重宝)鉛錢、

余按鉛錢有二品、輪郭鏤薄、文曰乾亨重宝。大者徑

寸重三銖九參、重宝二字伝形。小者径九分重三銖六參。余抵嶺外、始獲此錢。若銅錢。今世所存至多。

この按語は乾亨重宝鉛錢に付され、鉛錢に関するものである。南漢の出土錢は圧倒的に鉛錢が多く銅錢は少ないから、南宋時も同様であろう。従つて「今世所存至多」というのも鉛錢についての記述である。

(38) 斯波義信『宋代商業史研究』（風間書房、一九六八年）、三三二頁。

(39) 宮崎前掲『五代宋初の通貨問題』六一頁。

(40) 陸游『南唐書』卷二、顯德六年七月、

鑄大錢、文曰永通泉貨、一当十、与旧錢並行。又鑄

唐国通宝錢、二当開通錢之一。

(41) 馬令『南唐書』卷四、顯德六年、

秋七月、鍾謨請鑄大錢、以一当十、文曰永通泉貨。

……十有二月、罷鑄大錢。

(42) 唐国通宝二当一錢について、当二錢だとする記述もある。

是月、始鑄当十大錢、文曰永通泉貨。又鑄当二錢、

文曰唐国通宝、与開元錢並行。（『資治通鑑』卷二九

四、顯德六年七月）

「二当一」と「当二（一当二）」のいずれが正しいかについて意見が分かれる。宮崎前掲『五代宋初の通貨問題』、石光韜前掲「十国貨幣制度考」は「二当一」は不合理であるとして退ける。二当一が不合理だとする説は、一文の半分の幣値しかない銅錢はありえないとする考えであろうが、現存する唐国通宝の小型錢は、一文錢の半

分の重量で揃っており、二当一錢と見るのに相応しい。本稿は現存品のあることから出発する。

ところで『中国錢幣大辞典 魏晉南北朝隋唐五代十国編』は、唐国通宝には、二当一・一当一・一当二・一当五の四種があり、完整な一列の錢であるとし（六三六頁）、拓影を掲載する。実物にたれば、当二錢も二当一錢も存在し、どちらの記述もよいことになる。しかしながら、現存量は当二錢が非常に少ないのに対し、二当一錢は多い。どちらが当時重要な錢貨であつたかといえ、本文で述べるように、二当一錢である。このような観点から顯德六年の記述を見ると、より重要な錢貨として二当一錢を記述し、その他の三種の唐国通宝を載せていないと見做したい。

(43) 『泉志』卷四、開元錢、

建隆四年、其大臣韓熙載請鑄錢、每十錢即以鉄錢六權銅錢四而行、至乾德開宝中、遂不用銅錢。民間但以鉄錢貨易、至末年、銅錢一直鉄錢十。及李煜歸朝、鉄錢益無用。

馬令『南唐書』卷五、乾德二年、

春正月、始用鉄錢。以鉄錢使戸部侍郎韓熙載為兵部侍郎勤政殿學士。……至是有鉄錢之議、每十錢以鉄錢六權銅錢四、既而不用銅錢、民間但以鉄錢貿易、物価増涌、民復盜鑄、頗多芒刺、不及官場円淨、雖重其法、犯者益衆。至末年、銅錢一当鉄錢十。

建隆四年（九六三）鑄造の鉄開元は韓熙載の上請による。「每十錢即以鉄錢六權（雜）銅錢四」とは鉄錢六錢と銅

錢四錢の比率で混用して一〇錢とする意であらう。つまり鉄錢と銅錢は等価である。

(44) 『新五代史』卷六二、南唐世家、

景困於用兵、鍾謨請鑄大錢以一當十、文曰永通泉貨。謨嘗得罪而大錢廢。韓熙載又鑄鉄錢以一當二。

『文獻通考』卷九、錢幣考も同様である。

(45) 註(43)参照。

(46) 『長編』卷二八、太平興國二年、

李煜旧用鉄錢、於民不便。二月壬辰朔、(樊)若冰請置監於昇・鄂・饒等州、大鑄銅錢。凡山之出銅者、悉禁民採、並取以給官鑄。諸州官所貯銅錢數、尽発以市金帛輕貨、上供及博糴麥。銅錢既不渡江、益以新錢、民間錢愈多、鉄錢自当不用、悉鑄為農器、以給江北流民之帰附者、且除銅錢渡江之禁。詔從其請、民甚便之。

王楙『燕翼詒謀錄』卷三、

太平興國二年二月、詔官收民間鉄錢、鑄為農器、以給江北流民之帰附者。於是江南鉄錢尽矣。

(47) 『資治通鑑』卷二六六、開平元年二月甲辰、

悉斂境内錢、瘞於山顛、令民間用重泥為錢。(重泥、黏土也。)

『新五代史』卷三九、劉守光伝、

令燕人用墀土為錢、悉斂銅錢、鑿山而藏之。已而殺其工、以滅口。後人皆莫知其処。

(48) 丁福保『古錢大辭典』(中華書局、一九八二年。初版は一九三八年)。永安一千の項。

(49) 王莽錢と孫吳の錢貨については、宮澤前掲『中国銅錢の世界』を参照。

(50) 日野開三郎『五代史概説』(『日野開三郎東洋史学論集』第二卷、一九八〇年)。五一頁。

(51) 註(23)『文獻通考』卷九、錢幣考。

(52) 宮澤前掲『宋代中国の国家と經濟』第二部第二章「唐宋時代における銅錢の私鑄」三四一〜三四三頁。

(53) なお鉄錢について付言すると、鉄の小平錢は官鑄では後蜀・南唐のものが知られるのみで、史料上鑄造額が多いと推測できるのは南唐のものだけである。おそらく私鑄の鉄錢はこの限りでないとと思われるが、通貨圏として見ようとするとはつきりしたことが判明しない。通貨圏を想定する場合、鉛錢を主要な通貨と捉え、私鑄の鉄錢は從に位置づけするのがよいと考える。

(54) 宮崎前掲『五代宋初の通貨問題』第三章「五代の国家間貿易と国家間通貨」。

(55) 宮崎前掲『五代宋初の通貨問題』緒言。

図1 唐、開元通宝銅錢

図2 後晉、天福元宝銅錢民鑄

図3 後漢、漢元通宝銅錢

図4 後周、周元通宝銅錢

図5 前蜀、光天元宝銅錢

図6 後蜀、広政通宝鉄錢

図7 吳越、開元通宝鉛錢

図8 閩、開元通宝鉛錢、背閩

- 図 9 閩、開元通宝大鉄錢、背閩月
- 図 10 楚、乾封泉宝大鉄錢、背天
- 図 11 楚、開元通宝鉛錢、背潭
- 図 12 南漢、乾亨通宝銅錢
- 図 13 南漢、乾亨重宝鉛錢
- 図 14 南漢桂州、開元通宝鉛錢、背興
- 図 15 南唐、開元通宝篆書銅錢
- 図 16 南唐、永通泉貨大鉄錢
- 図 17 南唐、唐国通宝銅錢二当一錢
- 図 18 燕、永安一千大鉄錢
- 図 19 燕、貨布三百大鉄錢

〔附記〕本稿は二〇〇八年度特別研究費による研究成果の一部である。



圖12



圖13

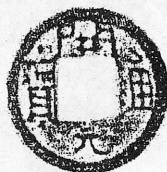


圖14



圖15



圖16



圖17

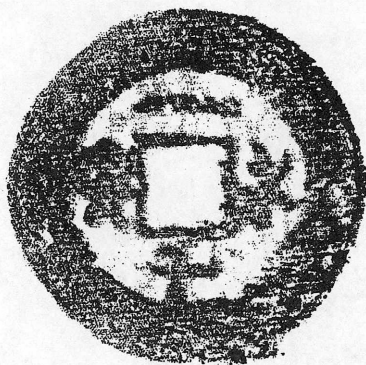


圖18



圖19



図 1

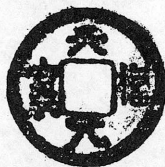


図 2

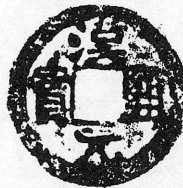


図 3



図 4



図 5



図 6

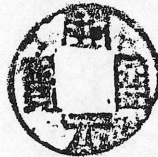


図 7

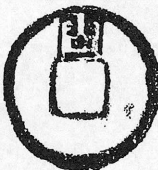


図 8

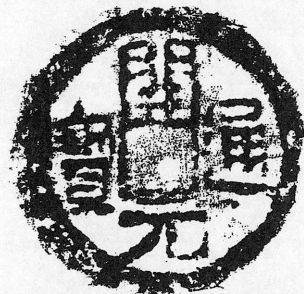


図 9

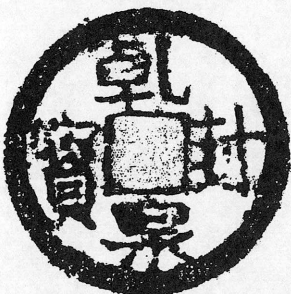


図10

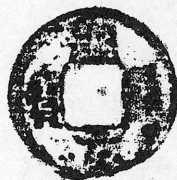


図11

*すべて原寸大

